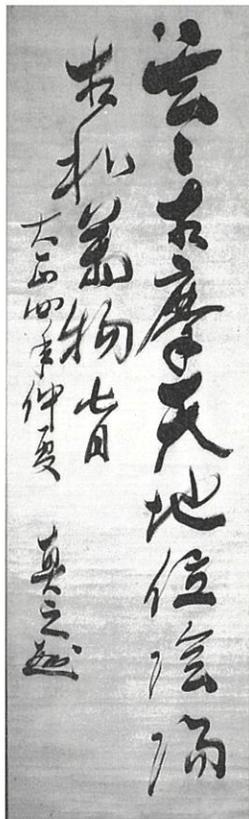


館蔵資料紹介 秋山真之書

「玄々相摩天地地位陰陽相和萬物育」

川島佳弘 坂の上の雲ミュージアム学芸員



本資料は、秋山真之直筆の漢詩幅（絹本）である。大きさは、全長縦2010ミリ×横551ミリ、本紙縦1363ミリ×横416ミリで、軸装されている。作成時期は、大正4（1915）年夏（6月頃）、真之が海軍省軍務局長を務めた48歳の時の書である。まずは、本文の内容を以下に示したい。

〔本文〕

玄々相摩天地地位陰陽
相和萬物育

大正四年仲夏 真之（花押）

〔読み下し〕

玄々相摩して天地は位す
陰陽相和して萬物は育す

儒教の代表的な經典のひとつ『中庸』に「致中和、天地位焉、万物育焉（中和を致して、天地位し、万物育す）」という一節がある。平穩で調和の取れた中和を実践することで、人間世界のみならず、自然世界のあり方も正しい状態となり、万物が健全な育成を遂げるといふ「天人相関説」に基

づく思想が表されている。本資料は、こうした儒教の思想をふまえて書き記されたと考えられる。

秋山真之は、名参謀であるとともに、名文家としても知られた。資料中の「玄々相摩」の「玄々」は、「奥深いさま、深遠なさま」という意味だが、『広辞苑』、これを「ふなべり」を意味する「舷」の字に置き換えると真之が残した名文につながる。

真之の死亡を報じた新聞記事を見ると『舷々相摩』は中将の起草の見出しから始まる一文に「頭脳明晰その神算的確にして然も又一面に文才あり、かの日露役に於て東郷元帥の報せる日本海海戦の『舷々相摩』の血を沸かせる戦報は実に東郷司令長官の麾下たりし当時の参謀少佐たる中将のものせるなり」とある（『東京朝日新聞』大正7年2月5

日）。この「舷々相摩」の語は、実際には明治37（1904）年3月10日の旅順口攻撃の戦報で使用された。翌11日作成の東郷平八郎連合艦隊司令長官報告で「敵ノ駆逐隊ニ会シ近距離ニ於テ約二十分間激戦シ朝潮、霞、暁ノ三艦ハ敵ノ諸艦ト殆ント舷々相摩セントスルカ如ク接戦シ敵ノ三四艦ニ猛烈ナル砲火ヲ加ヘタル」：と駆逐艦の接近戦の様子を報じている（『情報及祝電類一』「明治37、38年 戦時書類 卷169 情報及祝電類 戦死者遺族書翰」 防衛省防衛研究所所蔵）。

この戦報は、「舷々相摩し砲火相加ふ」の小見出しとともにすぐさま日本国内に伝えられた（『大阪毎日新聞』明治37年3月14日）。真之の東京大学予備門時代の同級生たちの回想にも「舷々相摩ス」の名文で天下を驚倒せしめた秋山君

（菊池謙二郎「追憶片々」）、「彼の舷々相摩すてふ名高き戦報を起草したとて、不朽の名を挙げて居る」（寺石正路「燈下與児談」）などあり、「本日天気晴朗ナレ共波高シ」と同様に「舷々相摩」が、真之の代名詞として広く認識されていた様子がわかる。

「玄々相摩」は、同音表記の「舷々相摩」を強く意識したものと推測される。本資料と同じ書き出しの書幅は、ほかにも確認できる（秋山真之会編『秋山真之』（昭和8年刊）口絵「將軍遺墨」参照）。本資料から、名文家としての秋山真之の一端がうかがえる。



海軍省軍務局長時代の秋山真之